和歌山大学令和元年台風19号に伴う災害ボランティアバス運行記

REPORT OF DISASTER VOLUNTEER BUS OPERATION FOR THE DAMAGE OF TYPHOON NO.19 IN 2019 BY WAKAYAMA UNIVERSITY

藤本多敬[1]・西川聖哲[1]・中村憲太郎[2]
Kazuhiro FUJIMOTO, Masanori NISHIKAWA and Kentaro NAKAMURA

[1]観光学部2年，[2]システム工学部1年

和歌山大学災害科学教育研究センターは2019年の12月20日から22日にかけての1泊3日の行程で，千曲川の堤防決壊によって広範囲に浸水被害を受けた長野市行きのボランティアバスを運行し，14名の学生がこれに参加した．本稿では，当ボランティアバスが企画された経緯，運行までの過程，並びにボランティア活動当日の活動の記録，参加した学生の感想を報告する．参加した学生からは様々な感想があり，各々何かしらの学びが得られたと考えられる．ここから災害頻発地帯，和歌山県にある和歌山大学でボランティアバスを運行されることは大変意義のあることではないかと考えられた．運行までの準備から現地でのボランティア活動を一貫して述べることで，今後ボランティアバスが運行される際の参考になることも期待される．

キーワード： *令和元年台風19号，災害ボランティア，ボランティアバス，長野市*

１．はじめに

近年，日本各地で自然災害が多発しており，それによる甚大な被害が発生するケースも頻発している．その傾向の中で日本に甚大な被害をもたらしたのが，令和元年台風第19号であった．10月6日3時にマリアナ諸島の東海上で発生した台風第19号は，非常に強い勢力を保ったまま12日19時前に伊豆半島に上陸し，13日12時に北海道の南東海上で温帯低気圧に変わった[1)]．台風第19号は西日本から東日本の太平洋側を中心に激しい雨をもたらし，広い範囲で土砂災害や洪水をもたらした．特に長野県長野市内を流れる千曲川において堤防越水に伴う堤防決壊が発生し，決壊現場の近くにある長野新幹線車両センターに留置されていた北陸新幹線車両10編成120両が冠水する被害が発生したことは，全国的にも注目された．

和歌山大学では，その令和元年台風第19号による被害を受けた住民を支援するために令和元年12月20日から22日にかけて，長野市内での災害ボランティア活動に伴うボランティアバスを運行した．本稿はボランティアバス運行の経緯や当日のボランティア活動内容などについて述べ，今後の災害ボランティアバス運行に向けての参考となることを目的とする．

２．ボランティアバスの運行について

和歌山大学では先の通り，令和元年台風第19号による被害を受けた住民を支援するために，令和元年12月20日から22日にかけて和歌山大学の学生，並びに教職員によるボランティア活動に伴うボランティアバスを運行した．運行に際しては紆余曲折があった．ここでは運行の経緯，道筋などについて述べる．

(1) 運行の経緯

和歌山大学においてボランティアバスの運行計画が始動したのは，令和元年台風第19号が日本に爪痕を残した直後であった．本学においては防災や自然災害に興味・関心を持つ学生が集う協働教育センター（クリエ）所属の学生団体である「防災のつどぴ」が設立されている．その所属の学生の一部から，「被災地を実際に訪れて，被害を受けた方への支援をしたい」などの声が挙がった．それに伴い，「防災のつどぴ」所属の学生が主導となり，学生が被災地へ赴き支援を行うためのボランティアバスの運行の計画を開始した．

(2) 運行までの道筋

当初はボランティアバス運行に係る諸費用は参加学生の自己負担となる予定であったが，運行に際して，本学の災害ボランティア向けの和歌山大学基金（災害支援基金事業）を活用することができることとなった．それにより，最終的にはバス借り上げ費用，並びにボランティア保険料をその基金から捻出することができ，学生の自己負担金額を少額とすることが可能となった．なお，大学の基金を使用するのにあたり，当初は学生主催でのボランティアバスの運行を計画していたが，それ以降は本学付属災害科学教育研究センター（以下，災害研）の主催事業に，学生の有志が企画・計画・運営に参画する形が取られた．学生は各バス会社に貸切バスの見積もり依頼の手配，並びに宿泊施設の手配などを担当し，正式な手配は災害研が担当することとなった．ボランティア実施場所に関しては，和歌山県からの距離などを勘案して千曲川の堤防越水による甚大な被害を受けた長野市となった．

当初は令和元年11月2日から4日にかけて実施する計画を行った．災害ボランティアは発災から時が経つにつれてニーズが減ってくることなどを考慮して，可能な限り直近の週末における実施が必要であった．実施日が直近であることから，早急に参加学生の募集を開始する必要がある中，災害研の公式的な募集に先立ち，発災後約1週間後となる10月18日に，ボランティアバスへの参加希望学生の募集を有志学生の口コミで開始した．その1週間後となる10月25日に本学の学内連絡システムのLive Campusにて，災害研による公式的なボランティアバスの実施の告知がされた．なお，バスや宿泊施設の手配に際しては実施日が直近に迫っていること，また秋の観光シーズンによる繁忙期と被っていたことにより，それらの手配が難航し，公式的な実施の告知が遅れた．しかし，公式的な募集開始がボランティアバスの運行の1週間前と迫っていたことや，ボランティアバスの運行日が3連休であったことなどから，問い合わせは多数あったが，参加希望として応募があった学生は数名のみであった．それにより災害研により参加者僅少のためボランティアバスの運行の中止が発表された．なお，次なるボランティアバス運行計画を行う中で現地のボランティアの実態把握を行う必要があり，参加希望学生のうち2名は11月2日から3日にかけて実際に長野市に赴き，ボランティア活動を実施した．その実施内容についてはここでは省略することとする．なお11月21日に，その2名の参加学生による報告会を実施し，後述する次なるボランティアバスの運行計画へと繋がることとなった．

一度はボランティアバスの運行計画は中止となったが，学生のボランティアの活動意思は強く，日程を改めて調整しスケジュールに余裕を持って12月21日から22日の実施に向け再度計画を行うこととなった．計画に当たっては，前回の計画において参加学生が集まらなかった原因を分析し，そこでの改善点を踏まえて計画を行った．前回は災害ボランティアとして参加者の募集を行ったが，災害ボランティアとなると必要以上に身構えてしまい，参加を躊躇う学生が出ていた可能性があった．今回は災害ボランティアにより気軽に参加できる形とするため，長野市内の主にりんご農家での支援を行う援農ボランティアを行うという形で募集を行うこととなった．その背景としては，本学にはagrico.という援農を行う学生サークルが存在し，その活動の一環として災害ボランティアをできないかとの狙いもあった．ただ，時が経つにつれ災害ボランティアの需要が減っていくことであろう中，12月17日をもって援農ボランティアの活動の募集が終了となった．それに伴い，和歌山大学の学生の災害ボランティア活動は予定を変更し，通常の災害ボランティアでの活動となった．なお長野市災害ボランティアセンターにおける令和元年の通常の災害ボランティア活動の募集も12月22日で終了となったため，ボランティアバスの運行のタイミングとしては丁度活動期間に間に合う形となった．なお参加学生の募集は実施予定日程の1ヶ月前となる11月15日に前回の計画時と同様に，ボランティアバスへの参加希望学生の募集を有志学生の口コミで開始した．今回は前回同様の口コミでの募集に加え，学内の掲示板やその時期に開催された本学の大学祭でのポスターによる告知も実施した．そして各種手配の後に11月26日に，本学の学内連絡システムのLive Campusにて，災害研による公式的な実施の告知がされた．募集に際しては，事前説明会も11月29日と12月4日の2回実施した．それらにより，今回のボランティアバスの実施においては最少催行人数を10人と設定していたが，前回の募集人数を上回る14名の参加希望学生が最終的に集まり，実施に繋がった（表-1）．なお，参加学生対象の説明会を12月16日と17日の2回実施した．事前説明会ではボランティアバスの概要やボランティアの心得について説明された．なお12月16日実施の事前説明会においては本学の学長からの激励を頂き，参加学生の士気の向上に繋がった．（藤本）

表-1 参加学生の内訳

	経済学部	教育学部	システム工学部	観光学部
1年		1	1	
2年			3	3
3年			1	
4年	2			
その他	1(M1)	1(教職大学院)	1(M1)	

３．ボランティアの活動の記録

ボランティア活動の詳細について時系列で述べる．時刻は筆者のメモとGoogleマップのタイムライン機能で記

録されているものに依存している．　一部，上記のどちらにも時刻の記録漏れがあったものは時刻のあとに“ごろ”と記している．

(1) 12月20日

筆者らボランティア参加者は21：30に本学広報室に集合した．広報室に入った者は本企画の代表学生である藤本に宿泊費（2,400円）を手渡した．途中，和歌山大学前駅より合流する1名を除く13名の学生がそろったところで，此松センター長からのお話しが始まった．そして参加者が一人ずつ自己紹介した．最後に広報室の方と，地域活性化総合センターの西川一弘准教授からの激励の言葉をいただき，一同はバスに乗り込んだ．今回私たちが利用したボランティアバスは野鉄観光株式会社の25人の中型バスであった．バス中央部にはトイレもあり，長距離移動に適切なバスを提供していただいた．

21：45　バスが大学を出発した．筆者のうちの一人が，事前に印刷していた国土地理院の浸水段彩図とボランティアセンター付近の国土地理院地図を配布し，目的地の地理関係を参加者に理解してもらうようにした．

22：10　和歌山大学前駅で合流する学生を拾い，無事参加予定者全員を乗せたバスは出発した．途中，阪和道の岸和田サービスエリア，東名高速道路の養老サービスエリア，そして長野自動車道梓川サービスエリアで休憩をとった．岸和田サービスエリアでは夕食を食べていなかった学生や小腹がすいた学生が食事をとる光景がよく見られた．

(2) 12月21日

4：35　梓川サービスエリア到着．このまま目的地に向かうと早く到着しすぎるため7：30までここで時間調整及び朝食，昼食購入の時間を設けた．長野県内にはボランティア支援としてボランティア参加者を対象にあらゆるサービスを行っている飲食店や宿泊施設，温泉がある．これらの店舗を長野県は“#One Naganoサポーター店舗”としてホームページにまとめている[2]．本サービスエリアのレストランもボランティア割引を実施していたため，サービスを享受した参加者もいた(図-1)．

8：45　長野市の北部災害ボランティアセンターの一サテライトの駐車場である“アグリながぬま”の第二駐車場に到着．サテライトの場所はその駐車場付近の特別養護老人ホームである．本ボランティアバスはいきなりサテライトのそばにバスをとめることができたのだが，普通のボランティアの流れは少しこれと異なる．ボランティアの受付は本部となるボランティアセンターで行うため，まずはボランティアセンターへ行くのがオーソドックスな流れである．しかしながら，筆者らの団体は事前登録をインターネットでしていたため，ボランティアセンターを経由せずに直接サテライトに向かうことができたと考えられる．駐車場には和歌山大学のボランティアバスだけでなく，全国各地から来たバスが駐車されていた．12月19日の深夜に和歌山を出発し，わたしたちより1日早く長野に入っている和歌山県社会福祉協議会のボランティアバスの姿もあった．申し込みをした和歌山大学一行はマッチングの時間を利用してボランティア活動をする準備をした．ここで，今回の装備を述べておく．参加者は長靴を履き，合羽を着て活動した．大学から支給されたものはオレンジ色の和歌山大学の公式ロゴが入ったビブス，ヘルメット，マスク，白い布手袋である．白い布手袋はゴム手袋を直接手につけた場合，汗をかいて滑りやすくなり，これを防ぐためである．待ち時間を利用してサテライトのスタッフから手渡された名前シールを記入し，胸に貼り付けた(図-2)．これはボラ

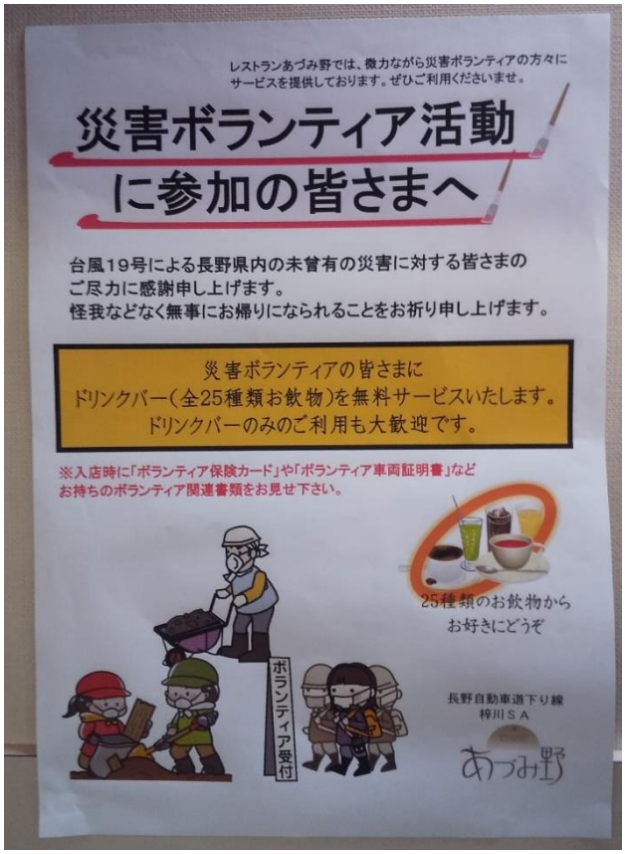

図-1 レストランのボランティア割引のポスター（筆者撮影）

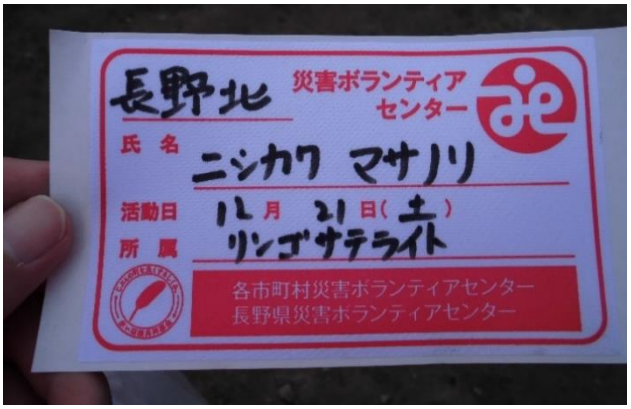

図-2 ボランティア活動の名前シール（筆者撮影）

ンティア活動をした証拠になり，ボランティア後に上述したボランティア対象のサービスを受ける権利の証明にもなる．

9：55　長野市社会福祉協議会の方から本日の活動の説明が開始．幸い，その日は和歌山大学からの参加者全員が同じ場所で活動することになった．サテライト職員から手渡されたメモもとにサテライトに置かれている活動に必要なシャベルや雑巾，ブラシ等を一輪車乗せ，被災者宅へ向かった(**図-3**)．和歌山大学生の塊には一人，個人で参加されている方も加わった．お話しをしてみると新潟県から来られたそうで，平成19年に発生した新潟県中越沖地震での被災経験があり，災害の大変さがわかるため参加したと語っておられた．

10：22　被災者宅に向けてリンゴサテライトを出発．数枚配布された住宅地図にはA～Eのアルファベットが記載されていた．これは被災者宅に向かう際に，重要なポイントになる点であり，そこに行けばボランティアの受け入れ側の方がおり，案内をして頂いた．

10：23　被災者宅への最後の曲がり角に到着．そこにいたボランティアセンターの職員からこれから訪れる被災者宅の復旧の現状が話される．作業の進行が遅れていること，この週末が年内最後の活動になることの確認などがあった．

10：30　その日ボランティア活動を行う被災者宅到着．到着次第，現場の指揮をされている認定NPO法人ICANの方から今日の作業内容について説明を受ける．和歌山大学生の中でも，家財道具などをきれいにするグループと水に浸かった書物の清掃作業をするグループに分かれて活動することになった．　前者のグループは蔵の中で被災したと思われる家財道具たちが裏庭のようなところに上下ブルーシートで挟まれた状態で置かれていたのだが，そのブルーシートをはがし，ブルーシートの泥と家財道具の泥をふき取ることから始めた．後者のグループは，水に浸かった書物に付着した泥を除去し，庭に設置したブルーシートの上に書物をページが広いた状態では，

図-3　用具を一輪車に乗せ，サテライトを経つ和歌山大学生ら（筆者撮影）

水に浸かった書物に付着した泥を除去し，庭に設置したブルーシートの上に書物をページが広いた状態で天日干しをする作業から始めた．また浸水した床板の交換作業を地元大工さんと共に行った．

12：10　昼休憩のため作業中断．前者のグループは家財道具を午前中に拭ききる予定だったのだが，小さな絵具の小瓶の泥をふき取るのに苦戦し，目標達成とはならなかった．後者のグループは概ね全ての書物の天日干しを行ったが，書物の量が多く泥の完璧な除去には至らなかった．歩いてサテライトへ戻る．サテライトへ戻るとポリタンク式の水道が用意されており，看護師の指導の下，手洗い，うがい薬によるうがいが徹底されていた．学生たちは昼食を取るなどして休憩をとった．他のボランティア参加者がチョコレート等のお菓子を分けてくださる場面もあった．

13：00　サテライトを出発し，再び被災者宅へ．

13：10　午後の活動開始．主に家財道具を担当していた学生たちは，引き続き絵具の瓶についた泥をふき取る作業を行った．その作業に終わりが見えてきたところを見計らって，昼休憩の間に乾いただろう家財道具を蔵へ運び入れた．蔵へ運び入れ終わると，次は家の中の汚れた床板や泥を家の外へ運び出す作業を行った．また，家の中にあったものを拭く作業も行った．紙についた泥を水拭きすることは困難なため，泥を落とすのには苦労した．15時ごろ　本日の活動を終了させる．ICANの方や社会福祉協議会の方からの挨拶し，解散．通常ならサテライトへ向かい，片付けをするのだが，混雑を避けるため，また，参加学生から堤防の決壊現場を視察したという声があったため，徒歩で堤防の決壊場所の視察に向かった．決壊場所にはかなり近くまで行けるのだが，まだ堤防の上を登ることはできない状況であった．堤防近くの手つかずの被災したリンゴ畑が一面に広がっていた光景には息をのむしかなかった．　リンゴ畑に堆積した土砂をよく見るとしっかりと下層に砂 上層に泥というように堆積しており，自然の摂理を実感した．　視察を終え，サテライトへ向かっているときに，自転車に乗った大学生が筆者ら和歌山大学生に声をかけてきた．声をかけてくださったのは北九州市立大学4年の須磨航さんである．須磨さんは2017年7月九州北部豪雨による災害が発生して以来，復旧・復興のボランティア活動に参加し，現在も被災地に足を運んで精力的に支援活動に取り組んでおられる方で[3]，今回の災害でも10月から長野に何度も入り，様々な支援活動を行われているそうだ．サテライトに到着するとまずボランティアセンターのスタッフに全員足元に着いた泥を高圧洗浄機で落としてもらった．その後，借りていた機材を返却し，昼休憩と同様手洗い・うがいをした．サテライトには炊き出しブースが設置されており，ボランティア参加者におかゆや地元のリンゴが振舞われた(**図-4**，**図-5**)．汚れたカッパや手袋の後始末をし，学生たちはバスに乗り込んだ．

図-4 振舞われたおかゆ（筆者撮影）

図-5 振舞われたリンゴ（筆者撮影）

16：31　宿泊場所である渋温泉に向けてリンゴサテライトを出発．ボランティア活動の第1日目が終わった．学生たちにはLINEグループのノートのコメント機能を用いて自分なりに以下のように振り返りをしてもらった（図-6）．

17：10　渋温泉の駐車場着．ここでバスを降り，徒歩で宿泊場所である“の猿HOSTEL”へ向かった．

17：23　の猿HOSTEL着．チェックインを済ませ，各自風呂に入るなり，夕食を取るなりした．渋温泉にも前述の“#One Nagano”サポーター店舗があり，そこで夕食をとる学生も多くいた．宿泊場所にしろ，渋温泉全体にしろ，外国人観光客含め多くの観光客がおり，報道だけを見ているとあたかも長野全体が壊滅的な被害を受け，衰退しているような印象を受けてしまうこともあるが，特に大きな被害がなかった”長野“では観光客の足も途絶えていないようで個人的には少し安堵した．

(3) 12月22日

宿泊場所からバスがある駐車場に向かう途中，地元の方々に話かけられる．ボランティアのために渋温泉に滞在していた旨を伝えると，かなり感心してほめてくださった．やはり遠方からボランティアに来てもらうという

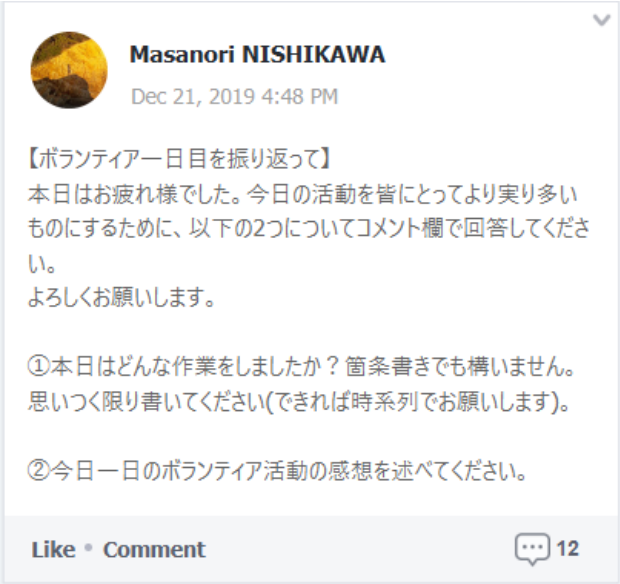

図-6 活動一日目の振り返りのワークのお題

うのはそれだけ被災地域側からするとありがたいことなのだとその会話で少し実感した．

8：00　渋温泉の駐車場に集合し，リンゴサテライトへ向けてバスが出発．

8：06　移動中のバス車内でとる朝食を購入するためにセブンイレブン山ノ内佐野店へ立ち寄る．

8：16　同店出発．

8：44　リンゴサテライト到着．　前日と同じく到着次第受付を済ませ，マッチングの時間で準備をした．前日と同じく，到着次第受付を済ませ，マッチングの時間で準備をした．

9：15　被災者宅着．　昨日と同じICANの方から今日は年内最後の活動になるので，被災者が暖かい形でお正月を迎えられるように，というお話しのあと，作業が分担された．この日は前日のように大きく二つのグループではなく，もう少し細かくグループ分けされた．一つ目のグループは「木の戸全体を拭く→木の枠についた土をたわしで取る→木の枠に防カビ剤を散布し乾拭き→ガラス部分を水拭き」を何往復も行った．二つ目のグループは板材の選別や木材の洗浄，プランター泥落とし等を行った．板材の選別では割れている板材と，割れていない板材とで選別した．木材の洗浄では高圧洗浄機を用いて汚れを取った．プランターの泥落としでは，乾いたたわしとタオルを用いてプランターの側面に付着した泥を落とした．その際，粉塵が発生する場面もあった．　プラスチックに付着した泥を落とすには，濡れたタオルではなく乾いたタオルを用いるとよいことを知った．これは濡れたタオルを用いると乾燥していた泥が団子状に固まってしまうためである．三つ目のグループは濡れた本，紙類を乾かし，外壁の拭き掃除を行った．濡れた本や紙類を開いて，板またはシートの上に並べた．

12時ごろ　本日の作業を終える．

12：06　被災者宅出発.

12：14　サテライト着.　昨日と同様に足元に着いた泥を高圧洗浄機で洗い流してもらい，借りていた用具を返却した．手洗いうがいをした者からバスに戻り，和歌山大学生のボランティア活動は終わった.

12：36　入浴と昼食のための場所に向かうためサテライトを出発.

13：00　YOU游ランド着．You游ランドは温泉や食事処が併設された森林スポーツ公園である．こちらも#One Naganoサポーター店舗ということで，筆者ら和歌山大学生は無料で入浴することができた．昼食もこの場所にある食堂でとった.

14：21　You 游ランド出発．この日も，前日と同様にLINEのノートへのコメント機能を使ってバスの中で活動の振り返りを学生にしてもらった.

17：09　中央道の恵那峡サービスエリア到着．ここでは長野土産を買う学生の姿が多く見受けられた.

17：28　恵那峡サービスエリア出発.

19：34　名神高速道路の草津サービスエリア到着．ここでほとんどの参加者が夕食をとる.

20：03　草津サービスエリア出発.

21：03　天王寺駅到着.

22時ごろ　和歌山大学到着

上記のような行程で参加者15名が無事, 関西に戻ってくることができた.（西川）

４．ボランティアを終えて

以下，3. で述べたLINEのコメントに記された参加学生の感想の抜粋である.

- 初経験者でも作業しやすい環境にあったと感じた.
- 防塵マスク・メガネなどの最低限の装備は必須だと思った.
- 全部泥を取ろうとするとキリがなく，どの程度まで綺麗にすれば良いのか判断が難しかった.
- 長野の現状や，被害状況などを聞きながら取り組めたのでよかった.
- 思ったより時間がかかった.
- 実際に堤防決壊の現場を見た時は，テレビで見るよりも悲惨で衝撃を受けた.
- リーダーシップを発揮し，自分で考えて行動することが大切だということを見にしみて感じた.
- 年齢関係なく，大人の方相手であっても的確な判断をして指示を出すことは大切だということを学んだ.
- おわってしまえば，あっという間だった.
- どの作業も丁寧に急いでする必要があることがわかった.
- 被災現場を見たらもっと役に立ちたいと思うようになった.
- 自分でも少しの役には立てたのではないかと思った.
- 一軒の家を片付けるのがいかに大変な作業なのかわかった.
- 指示をすぐに覚えられず，作業をスムーズに進めることができなかった.
- 災害からの復旧・復興を行うためには，多くの資材と人員がいることを痛感した.
- 作業はとても細かい作業で根気もいり，到底1人でできることではないと感じた.
- 自らの能力に応じてできる仕事を見つけ，効率よく仕事をするということが大切だと感じた.
- 被災者の方はこのような現実と毎日向き合わなければいけないと考えると心が痛んだ．今後も防災に対する意識を高め，ボランティアに積極的に参加してみたいと思った.
- 清掃が完了したお家を見ることが出来ないのは名残惜しいが，被災者のために活動できたことは誇らしく思う.
- 教員になったとき，こどもたちに話したい体験になった.
- 災害というものの恐ろしさ，被災地の苦労について身をもって感じることができた.

このように，参加者の中では行動力・判断力の低さなど個人的な課題を見出した学生が大半であった．また，テレビなどのマスメディアでは見たり聞いたりしているが，実際に大きな災害を直接経験したことがない学生も多く，災害というものの恐ろしさや被災地の苦労について身をもって感じることができた学生も多かった．さらに作業は到底一人で行うことができるものではなく，他団体とも協力することが必要となる．そこで，個人から集団へ，効率よく動く方法を個人個人が考え，全員がその意識を持つことが大切だということを学んだ．さらに，今回のボランティアを通して多くの人との「つながり」を感じることができた．ボランティアセンターの方や地域の方々との触れ合い，ボランティアとして来ていた他のチームの人との交流，そしてなにより有志で集まった今回のボランティアバスのメンバー同士での話し合いなど，今まで出会い喋ることがなかった多くの人たちとの「つながり」を持つことができた．それぞれ住んでいる地域や立場，環境は違ってもお互い助け合う，この想いはとても大切なことである．今回は留学生も2名参加があったが，留学生にとっても，日本には助け合いの精神を持つ人が多くいるということを改めて認識することができた．このボランティアの気づきと価値をどう発信していくか，どうやって次につなげていくのか，具体的なアクションが求められる.（中村）

５．終わりに

本稿では令和元年台風19号による和歌山大学ボランティアバスの運行への道筋，そしてボランティア活動で感じたことについてまとめた．近年日本各地で自然災害が多く発生しており，本学が構える和歌山県においても平成23年に紀伊半島大水害による土砂災害の被害が発生し，和歌山県内だけで56名の方が亡くなり，5人の行方不明者をもたらした[4]．また近い将来，和歌山県では南海トラフ地震による地震被害や津波被害などが予想されている．このように和歌山県では自然災害と密接な関係にあるが，それゆえに和歌山県で学ぶ学生は日頃から防災・減災に対する意識を所持し，万が一に備えることが必要であるのではないかと考える．その点，学生が自然災害の発生した地域を実際に目の当たりにし，現地においてボランティアに従事することは，自然災害の脅威を認知する点でも効果のあることではないかと考察する．

今回のボランティアバスの実施においては，学内での決裁に時間を要したことにより，計画開始から公式的な告知開始まで時間を要した．災害ボランティアにおいては発災後まもなくのボランティア派遣が必要とされていることもあり，今後ボランティアバスの運行を実施する事象に備え，予め運行に向けた学内での手続きをマニュアル化，または簡素化し，迅速なボランティア派遣に取り組む必要があるのではないかと提言する．（藤本）

謝辞：今回のボランティアバスの運行に当たり尽力してくださった全ての方に感謝申し上げる．とりわけ，責任者及び当日の引率をしてくださった災害研のセンター長の此松昌彦教授，並びに実施にあたって様々な支援をくださった同センターの西川一弘准教授，事務補佐員の林美由貴氏には大変お世話になった．なお，ボランティアバスの運行においては和歌山大学基金の支援を受けた．併せて感謝申し上げる．

参考文献

1) 消防庁応急対策室：令和元年台風第19号及び前線による大雨による 被害及び消防機関等の対応状況（第64報），pp.1, 2020
2) 長野県：ボランティアの皆様向け支援情報，<https://www.pref.nagano.lg.jp/bosai/201910volunteer.html>, 2020年1月30日アクセス.
3) 北九州市立大学：2018年度学生表彰式が行われました！【広報スタッフ日記】，<https://www.kitakyu-u.ac.jp/news/detail/4152.html>，2020年1月30日アクセス.
4) 消防庁応急対策室：平成 23 年台風第 12 号による被害状況及び消防機関の活動状況等について（最終報），pp.2-3, 2017.

（2020. 1. 31受付）